

まちなみ発見

伊達 美徳

日本のハイデルベルクは今、

新しさと古さの調和を模索している

岡山県 高梁・旧城下町

ドイツに故郷があった

この2枚づつの写真と地図を見比べていただきたい。どうです、よく似ているでしょう。

4年前、ドイツの有名な大学街のハイデルベルク旧市街で私はデジャヴュにおそわれた。見知らぬ古い街を歩いて懐かしい気になった経験は多くのにあるだろう。もつと進んで、ここは昔いつか来たことがあるぞ」と錯覚するほどになると、フランス語でデジャヴュ(既視感)というそつだ。

ハイデルベルクは始めてなのに、家並みや路地の向こうの山、川、城、石垣などの風景が、歩くにつれて懐かしさ以上の何かが迫ってくる。モヤモヤ気分が脳に溜まってくる。歩きつかれた頃、市街地のネッカー川対岸の丘の上から街を見おろして分かった。

「高梁だつ、ここは…」と思わず叫んで、一気に晴ればれとした。実は、高梁は私の生まれ故郷である。40数年も前に離れても身にしみこんだ故郷の風景が、はるか遠くのハイデルベルクで出現したのは驚いた。

街にもあるそっくりさん

城下町だった岡山県高梁市の中心街は、高梁川の盆地の中にある。アルト・ハイデルベルク、つまりハイデルベルク旧市街も、ドイツには珍しい盆地だ。

盆地の大きさ、川と街・城と城主館・社寺と教会の位置、道と家並みの構成など、両者はそっくりだ。もちろん家屋のデザインは異なるが、それを越えて似ているのだ。

その時わたしは新発見のつもりだったが、後で調べると慶応大学教授だった池田潔さんが今から36年も前に指摘していた。

池田さんは古城と川と緑の山々の素晴らしい環境が似ていることを指摘し、高梁は日本のハイデルベルクを目指して教育の町にせよ、と講演したそつだ。

私の新発見でないのはちよつと口惜しいが、わが眼の正しさの証明にもなった。

人口2万6千人で大学2つ高校5つ

そして今、市とはいっても人口2

万6千人の町に吉備国際大学と順正短期大学があり、高校は5つもあるのだから、池田さんの提言はまさに実現した。

人口の中で高齢者の割合は高いが、15歳から24歳までの人口が飛び抜けて多いのが高梁の特徴だ。活気のある若い学生たちがアルト・ハイデルベルク並みに居るらしい。

そのドイツの古都市に負けずに、高梁にも古城があり、中心街には伝統的な商家群や武家屋敷群の日本の町並みがいまも生きています。

だが、古い伝統木造の建築も次第に新材料の新デザインに建て替えられつつあるし、学園都市となった今ではあちこちに学生向けウォンルームマンションも建ち出した。

のんびりと盆地の中で暮らす

らしていた人たちは、学生たちがやってきて活気がでたと喜ぶ一方で、これまでの町並みが崩れて行くのに、これぞよいのかと気がついてきた。



ハイデルベルク旧市街をネッカー川対岸から見る



高梁城下町市街を高梁川対岸から見る

●高梁とハイデルベルクを比較して、地形と景観は似ているが細部は

こちら側が高梁 こちら側がハイデルベルク



メインストリートは幅広でなまなましい



塔が二つも見える横丁



宮内省陳列大学は後はずれの山の半腹にある



御嶽小の城主邸跡には無様な高校の建物がある



かつては町屋に黒瓦が揃ったり村だったが今はかなり崩れてきてしまった



陸地の向こうに山の峰が見える風景



備中松山城も修復と復元が進められている

注: *印の写真について、著作権の問題があればお教え下さい。*印の地は伊達町

新しいもの古いもの

狭い盆地の中に大学の校舎や学生マンションが建てば、どうしても中高層建築となって町並みや風景を攪乱する。しかし、それは町が活力を持つている証拠でもある。

古いままの家に暮らすことも我慢できないから建て替えた。だがそうすると高梁の町の個性が失われる。どうやって共存するか、この悩みは高梁に限らないだろう。

市街を小高いところから眺めると低い瓦の家並みの中に、塔状の建物があちこちに建つのに気がつく。医院と学生マンションだ。どうもこの街では中高層の建物の階段室を突出させて塔にするのが流行のようだ。

古いものと新しいものの調和は決して難しいことではないはずだ。疑洋風建築の高梁キリスト教会や郷土資料館(元は小学校だった)も、できたばかりの明治の頃は調和してはいなかっただろう。しかし今では美しい風景の要素として、町並みをひき締めている。

塔のある町

伝統的町並みの軒線から突出するマンションには、道路からバックして建っているものが多い。その引き具合と塔状の姿が、新たな調和を生み出すような、なにかうまい手はないものか。

案外、ハイデルベルクならぬイタ

リアの塔のある町で有名なサン・ジミニャーノ風にするのも面白いかもしれない。

南北に長い高梁の町の南半分は、昭和以後の新しい街であり、新開発はこちらに今も続けられている。北半分が個性的であるのに比べて、こちらはどこの都市にもある風景だ。

JR高梁駅のあるこちらは街の玄関でもあるから、それらしい風格のある風景がほしいものだ。それは北半分の伝統風景を真似するものでなく、新しい装いであってもよい。

風景を守るか都市計画

中心街はサツマ芋のような形の盆地だ。北端に山城の天守閣の城山

その麓に城主の館、そこから武家町、町人町が南に向かつて細長く広がる。道が屈曲する交差点が随所にあつて、城下町特有の形を残している。しかし自動車時代になって、このような鍵折れの辻は次第になくなりつつある。

この町の風景を大切にしようとして、今年から『町並み建築デザイン賞』が始まったという。伝統的なまちなみにマッチした新しい建物ばかりでなく、古い建物や塀を町並みに調和して改装・修復したのもも選考の対象とした。

まちづくりの話、市の文化財保護審議会委員の平見郡司さん(六十歳)に聞く。

『この賞は商工会議所が主体になってやりましたが、これがきっかけで、町並み保存が市民の考えにも入ってきました』 その町並み保存と都市計画とが連動しているのではありませんか、という問いに、平見さんの答えはちよつと意外であつた。

『実は昨年に都市計画の地域指定の見直しがありました。原案を見てびっくり。頼久寺庭園の借景となる地域に今よりも高い建物が建てられる変更案だつたんですよ』

頼久寺とは、江戸時代の幕府官僚の造園家であり建築家として有名な小堀遠州が、江戸初期この町に一時滞在していた寺だ。そこに彼のデザインになる美しい庭がある。ツツジの大刈込みの向うに木立ちがあり、その背後に愛宕山が借景としてそび



頼久寺庭園 さつきの大刈り込みと雄大な借景が美しい

え、小さい庭なのに雄大な造型である。その借景に異物が見えては庭園は台無しだ。慌ててあちこちに働きかけて、もとのようにしたという。

都市計画は、都市の風景を壊すこともできるし、守ることもできるという例だらう。

珍しい山城の復元

盆地北端の小高く険しい臥牛山頂には、天守が昔のままに建っている。備中松山城とよばれるこの城は、1873年に廃城令が出ても山上にあるために、幸運にも取り壊しを逃れて放置された。それが重要文化財となり、今や市のシンボルとなっている。

今から30年ほど前、日本のあちこちでコンクリートの天守閣を建て



武家屋敷町の石火矢町 突き当たりには城主館跡の高校 右上方に城山が見える

る流行があつた。最近またお城ブームのようで、今度は木造で建てるのが流行らしい。

最近、この天守の周辺の櫓や門などが復元されて、ここもお城でまち起こしだ。城も素朴なつくりでなかなかよい。

この山のうっそうと繁茂する森の中には、野生の日本猿群も生息する。

明治の洋風建築

この山の麓には御根小屋と呼ばれた城主の館があつた。堂々たる石垣や土塀を巡らせて、ハイデルベルクの城塞と地形的にはそっくりだ。今は県立高校の無粋なコンクリート造の校舎が立ち並び、あちらの古城とはくらべようもない。

そう言えば、昔ここには旧制中学



伝統的街並みの中に建つワイルドマンション

校時代からの明治建築の疑洋風木造の本館校舎があつたが、あれはどこに行つたのだらう、まさかあの立派な建築を壊してしまったのでは。

同じ岡山県内の津山高校の本館がNHK朝の連続TV小説「あぐり」の主人公の学校として出た。あちらは残つて国指定の重要文化財となっている。

校内に今も残る木造洋風建築は、門の脇に有終館とよばれるかつての図書館があり、ちよつと可愛らしいデザインである。

寅さんの藝弟の武家屋敷

高等学校の足元から昔の武家屋敷町が広がり、石火矢町は白壁土塀と門構えの続く典型的な町並みだ。

この町並みを北に見通すと、緑の濃い臥牛山をバックに御根小屋の石垣があり、それに向かつて武家屋敷の土塀がつづいて、なかなか格好つく伝統的風景である。

ただし、その正面に先程の高校の校舎が構えていて、その環境に不釣合なデザインをなんとかならないものかと気になる。

映画寅さんシリーズの舞台に高梁は2回とりあげられた。妹さくらの夫の生家がこの武家屋敷の中にあるという設定だつた。白壁塀の門から渥美清が飛び出す向こうに、伯備線の蒸気機関車が迫るシーンがあつた。

商家の町並みも素晴らしい

城主の館に近い山寄りの地域は武家屋敷町だが、そこから南に高梁川

に平行して商人町が続く。新町、本町、鍛冶町、下町などには、今も伝統的な町家が軒を連ねている。

この町並みを建築史の専門家として調査した東京芸術大学の志村直愛さん(三十四歳)に、高梁の町並みの価値を聞いてみた。

「町のシンボルの高梁川と松山城が町並みの姿に大きな影響を与えているのが読みとれますね。江戸時代からの商家や商人町独特の短冊状の地割に、平入り屋根が続く町並みは、よく城下町らしい風格を伝

えていて美しいし、歴史的にも貴重です」

これら商家の町並みは、武家屋敷ほどには保全策がないために見かけは悪いが、よく見ると実はかなり立派なものである。

これ程に立派な伝統的建築群の風景が、電柱電線、街路灯、看板などの陰に隠れているのは、宝の持ちぐされでも構わない。看板を外すだけでも美しい町並みが出現するから、商店街でぜひ試していただきたい。商家の伝統建築に混じってところ

どころに教会、写真館、医院など、戦前のしやれた洋館風建物があるのも面白い。それらを発見しつつ歩くと楽しい街だ。

「不適塾」の人たち

ちよっと面白い活動を紹介します。藤森賢一さん(六十七歳)は、「不適塾」の塾長だ。藤森ファンの大人たちの学習塾のようなものらしい。始めてから10年、全国各地から講師をよんで月例の公開講座そして飲み会をやる。

藤森さんは昔は県立高校の国語教師だったが、今は高野山大学の国文学の教授である。地元にも全国にも教え子や友人が多いため、その中から無報酬でやってきて講義してくれる人を選ぶのだそつだ。

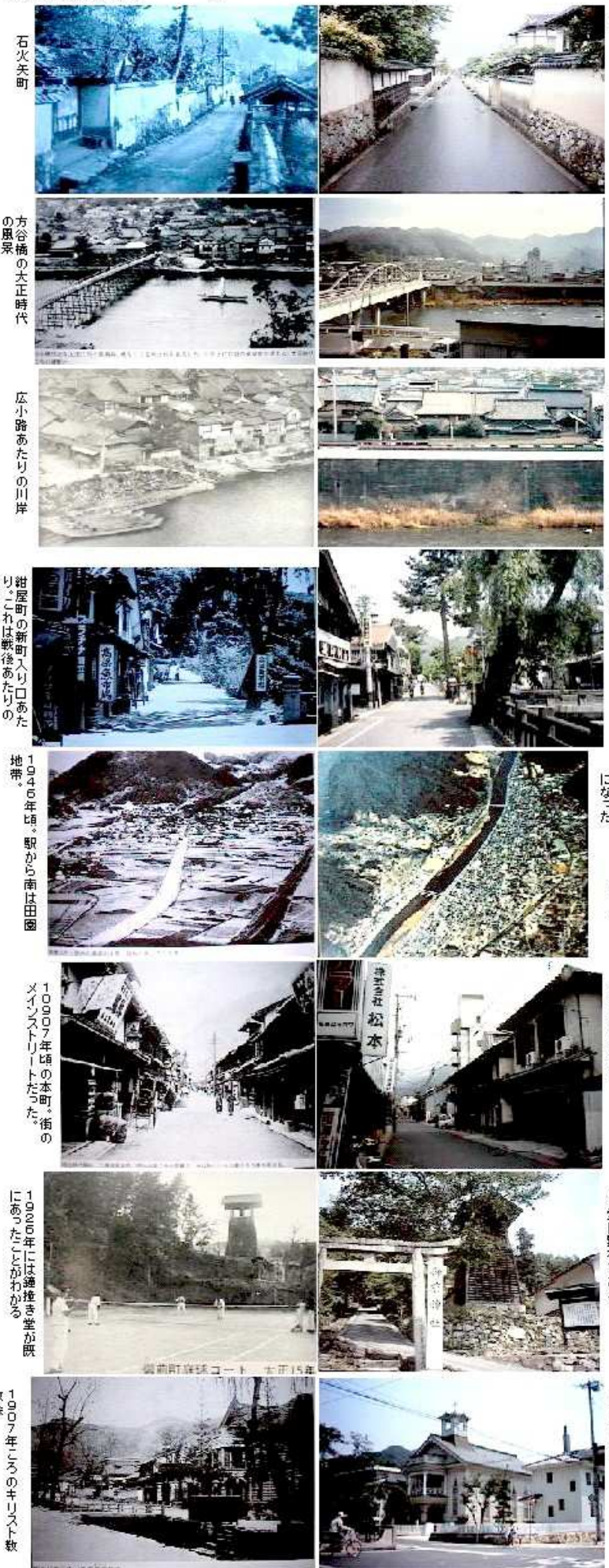
藤森ファンを中心に市民があつまる私塾で、地元にいる教え子たちが事務局を務める。

塾の名前の由来は、江戸時代の備中出身である蘭学者の緒方洪庵主宰の「適塾」がもとにあることはいまでもない。不敵にも「不適」塾と

高梁今昔比較写真

昔

今



石火町

方谷橋の大江時代の風景

広小路あたりの川岸

紺屋町の新町入り口あたり。これは戦後あたりの写真か。

1946年頃。駅から南は田園地帯。

1997年頃の町並りの写真。メインストリートだった。

1926年には鐘撞き堂が既にあったことがわかる。

1907年頃のキリスト教教会

美しく修復されて、観光地となった

広小路あたりの川岸の風景だが今は陸軍と国道で川と街は分断された

美観地区に指定して、修復された紺屋町は観光の拠点。

盆地のほとんどは市街地になった

今では人通りも少ない本町だがワンルームマンションが建ち、若者が住んでいるのか。

75年以上の年齢の鐘撞き堂は現在である

昔はなかつた屋根上に鐘撞がついていた

注:現代の写真は、空撮の他は伊達撮影。伊達撮影の他の写真で著作権の問題があればご指示下さいませ。



左 藤森先生 上 平見郡司さん



不適塾の風景(98.5)

名づけたのは、藤森先生一流のシャレであり、へそ曲りでもある。藤森塾長はいつ。まちづくりにおいても、値打ちあるものと無いものを見分ける『眼』が大切。いろいろの分野で専門の学問をしている人の考え方、や生き方を聴いているうちに、『眼』が自然に身についてくるのを期待しています。事務局も手弁当なら講師も手弁当で全国からやってくる。毎月の会が10年も続いているのは大変だが、手弁当だからこそだろ。太い人脈の尾根が、狭い盆地の中から全国に続いているのだ。

高梁市のデータ

- ・岡山県の西を南北に流れる高梁川中流にある。地域の大部分が吉備高原の山間部だが、中心街はかつての備中松山藩の城下町で、歴史的雰囲気濃い盆地である。
- ・行政人口は2万6千人で減少傾向(注2)
- ・JR伯備線で岡山駅から特急「やくも」に乗って34分、中心街の備中高梁駅に着く。この他に市内に4駅ある。
- ・中国横断自動車道路の賀陽ICから12分

まちなみ

- ・まちなみ保全形成施策 - 高梁市環境保全条例。岡山県景観保全条例による景観モデル地区指定。岡山県指定石火矢町ふるさと村。町並み建築デザイン賞制度。
- ・主な伝統町並み - 武家屋敷群(御前町、石火矢町・中之町)。商家群(新町・本町・下町)。紺屋町美観地区。社寺群(街の東の山裾一帯)。
- ・近代洋風建築 - 高梁キリスト教会堂(柿木町)、高梁市郷土資料館(向町)、高梁高校有終館(内山下)。
- ・隣りの成羽町吹屋に、ベンガラ問屋商家の町並み(重要伝統的建造物群地区)。

名所

- 備中松山城(内山下)、頼久寺庭園(頼久寺町)、松連寺(上谷町)、

祭り・行事

- 松山踊り(8月14日、16日)、
- 近似稻荷祭礼(12月第1土・日曜日)、御前神社・八幡神社秋祭り(1

0月第2日曜日) 美味、名品
高梁川の天然鮎料理。ゆず味の懐かしい和菓子「柚餅子」。ひな人形、五万石味噌。

注1：小論は、雑誌「まちなみ建築フォーラム」(1997・12 建築フォーラム社)に掲載した。ただし、写真は本サイトに掲載にあたって差換えた(2008)。
注2：2007年近隣町村と合併して人口は3万人を越えたが、実質的な内容は合併前後で変りはない(071111)。